

隨泉寺寺報

平成22年(2010年)11月号 第483号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

後期門信徒講座

講師 住職自修

講題 『浄土真宗の作法とお勤め』

■役員研修会 ～少し勉強をしてみましょう～

このごろいろんな会や組織が続けていくのが難しくなっているそうです。その大きな原因の一つが役員のなり手がいないということです。たしかに役員になってお世話をするということは大変です。うまくやって当たり前。役員の問題が起これるとその人のせいにされたりして……。

しかし役員になったので、その組織の内容がわかり楽しくなったとか、今まではわからなかったことが少し理解できたとか、友達が出来たとか、よかったとおもえることは沢山あります。人生に意味の無いことは一つもありません。そこで今回は役員研修会で作法とお経の練習をします。

来年は親鸞聖人750回大遠忌が勤められます。これにあわせて《音楽法要》が制定されました。来年の5月12日から14日まで隨泉寺からお参りいたします。その時のお勤めがこの《音楽法要》です。練習をします。ぜひとも参加してください。本は用意しておきます。

11月の法座予定

11月 7日……………掃除 長者原西
11月 8日～15日まで……………菊花・絵画・作品展
11月14日昼席午後1時より……………後期門信徒講座
11月14日夜席……………出張法座 なし
11月15日朝席午前10時より……………役員研修会 おとき
11月15日昼席午後1時より……………後期門信徒講座 映画鑑賞
12月 2日午後4時より……………門信徒会本部役員会 忘年会

☆ 映画【折り梅】 11月15日午後1時より

門信徒講座の二日目、昼席は去年、お知らせしたように映画鑑賞にします。なるべく近所の人も誘い合わせて参加してください。



【折り梅】名古屋郊外に暮らす4人家族に、夫の母・政子(吉行和子)が同居することになった。一家の主婦・巴(原田美枝子)は義母とうまくやっとうと張り切るが、同居してまもなく政子の変調をきたす。ゴミ集積所の場所が分からなくなったり、巴の作った弁当を床にぶちまけたりする政子に周囲は戸惑い、苛立ち、やがて家族の雰囲気は険悪になる。思いあまった巴がいやがる政子を無理矢理病院に連れてゆくと、アルツハイマー型痴呆症と診断される……。

映画『折り梅』は、義母が認知症になったことで、崩壊しかけた家庭が、さまざまな葛藤を経て、見事に再生した実話をして、人間の無限の可能性を描いた感動作である。その過程と思いもかけない展開は、見る者に素晴らしい希望を与えてくれることだろう。

☆菊花展・絵画・手作り作品展 11月8(月)～15日(月)

いまよりは またさく花も なきものを いたくなおきそ 菊のうへの露

『新古今和歌集』509 源定頼

秋の花の代表のような菊の花は、その年の最後を飾る花として哀愁を帯びるものです。今年もいよいよ年末が迫ってくるような寂しさを感じます。

今年も菊花・絵画展に加え、手作り作品展を開催します。去年は近くのラムーに来られた方が、お寺にきれいな花が展示してあるということで、山門をくぐって見に来ていただきました。



門信徒の中で菊の花の鉢植え・絵画・木工・陶芸・絵手紙・手作り作品等ありましたら出展下さい。又、隣近所でこれぞと思われる方がおられましたら、声をかけてください期間は11月8日～15日までの予定です。楽しみにしています。自薦他薦を問いません。絵画だけでなく、陶芸や木彫、刺繍・絵手紙なども、歓迎です。

出品される方は7日の午後にお寺まで持ってきてください。

☆御礼

永代経懇志 金 弍拾五萬円 井谷陽一殿 故 井谷靖志様 特 永代経志として

☆御礼

11月

恩を報じ 徳を謝せよ

『浄土文類聚砂』(註釈版聖典 477 貫)

「阿弥陀仏に帰依せよ」と阿弥陀仏みずから命じていただいたおかげで、親鸞聖人は、浄土への道が開けたとされます。

「帰依せよ」という仏の命令は、生死の苦すなわちいかに生きようとまた死に至っても、思いりに煩惱を離れられないことに悩み、道を求めておられた聖人にとっては大きな恵みでした。だからこそ「恩を報じ 徳を謝せよ」という今月の言葉になりました。

「恩を報じ 徳を謝せよ」といわれれば、義務感で報じなければならないという感じがしますが、そうではありません。聖人は、信心を得たものがこの世で受けるご利益として、知恩報徳の益をあげられます。恩恵に報いることが利益である、つまり、今月の言葉に即していえば、報じることができるという思いで「謝せよ」といわれています。



その一方で、聖人は、阿弥陀仏のはたらきがわからないから、阿弥陀仏の恩恵に報いたいという心にならないといわれます。また、阿弥陀仏のはたらきを知り、早く仏恩を報じる身となれともいわれます。

聖人は浄土の教えを広めた方ですから、その著述の中で語られることは、念仏、信心などであり、日々の生活を語られることはほとんどありません。聖人のお言葉と後の念仏者の生き方から推測すると、聖人は報恩感謝の思いで日々を過ごされたと考えられます。

浄土真宗の僧侶で、教育者として有名な東井義雄先生は、原稿用紙も筆記具も机も座布団も何一つ自分では作り出せない、みな誰かのご労作であるといわれました。そしてご労作の中に生かされているご自身のことを、おかげさまのど真ん中といわれました。

東井先生ご自身からは「これが報謝の行いです」という言葉は見られず、むしろ、おかげさまのど真ん中にいて、恩恵ばかりをいただいて「すみません」といわれます。しかし、「すみません」という言葉が私には尊く感じられ、東井先生の生活が感恩の思いから出たものであることが容易に推察できます。

よく見つめてみると、東井先生がいわれるように、私たちは多くの恩恵の中に生かされています。また、私はこのことが真実だと思います。しかし、恩恵に気づかなければ、よろこびの心も感謝の言葉も出てきません。

恩恵に気づく目をもつことができれば、あれも恩恵、これもおかげさまと感じられ、恩恵の中に生かされていることがわかり、よろこびや感謝の言葉になってきます。

そんな中で、いつの間にか、よろこびの心から報謝の行いができてきます。これが聖人がいわれるご利益としての報恩の行いの一 であると考えています。

☆父と れて

父が病気であると判明した時、正直驚くことはありませんでした。数か月前からの体の変化と、ここ数週間の体の不調に少し自分の中で覚悟しなければならないという気持ちがあったからです。ただ、検査結果が「何でもなかったよ」という返事が来てくれたら・・・という祈りの気持ちでした。

検査結果の日、「余命2カ月」父はべそをかいて帰ってきたそうです。父は「すまんのう、悪かったのう」と謝り、何よりも「孫のことを少しでも長く見ていたかった」と話してくれました。父が泣くところはほとんど見たことは見たことはありません。昔から家で騒げば「やかましい!」「なにしょーんなら!」と怒号を飛ばし、家族親 の中でも常に中心にいる世話役として存在していました。

小さい頃はおっかなくて、いつも遊んでばかりいると怒られ、ただそんな父を見返してやりたい、褒められたいという一心が、先へ先へと進む原動力になりました。



これまで、本当に自由に育ててくれた父、何かあれば電話をくれ、嬉しいことも悲しいことも理解してくれました。私が30歳を過ぎようやく家庭をもち、孫ができた時は本当に喜んでくれ孫の成長を見せられることでやっと親孝行ができてきたのかと思ってきたところでした。

病床の父は、病気の苦しさや不安と悲しみを抱えながらも家族や見舞に来られ方に笑顔を見せてくれました。私は仕事で許される限り父のそばに居り、18歳まで髪

を切ってくれた父に散髪をし、家族皆で出来る限りの介護をしました。

そして父に私のこれから将来の仕事・生活・家族の話をしました。それは、自分の目標と孫の将来の話です。私は父に「潤太はオレと同じ消防に行っていきたいけど、まあどうだろね?」なんて話すと、父は遠くを見て微笑んでくれました。



父は病気になったけど、「最後に家族が本当に一つになってくれて嬉しい」と何度も言ってくれました。本当は、ずっと先に私が老いても父の話しが聞きたかったし、相談もしたかったけれど。父は信頼してくれていると思います。

父はこれからも家族の心の中で見守っていてくれます。わたしはいつも心の父と話し、これからも家族を守り、父の期待に応えていきます。孫の潤太を大切にしっかりと育てます。

北尾 晴 釋 達 平成22年7月9日往生 東京都 長男 北尾 洋